



No.45

ZEN 45号 2010.8
発行・編集 全道美術協会事務局
渡辺貞之方 Tel. (0164)22-3597
〒074-0009 深川市9条17-44
印刷 株式会社 アイワード

● あの日あの時 第11回

1. 「今、ここ、シレットコにて」

二 部 黎

65回展の審査を終えて、シレットコにもどった。ここ数年、各部門一般応募点数が減少傾向にあるという。カルチャーブームが一段落した後のこの不安な世の中、絵など描いていられないという想いが、若者を支配しているのだろうが、こんな時代だからなおのこと、命は芸術を必要としてくると思っている。

五月末に雪が降るシレットコの冬であったけれど、ようやく気温があがり、野の草花がいっせいに咲き出した。

およそ半年を冬の気配が占める地の果ての、六月の美しさと力強さは、厳しい冬の間貯え続けたエネルギーが一気に吹き出したように見える。

斜里の街から15キロ山に入ったこの地はオンネヌプリ(斜里岳)の一目、世界自然遺産のエリアに近く、伏流水がこんこんと湧きあがる、百人ほどが住む集落。

移り住んで七年が過ぎた。

真冬、吹雪きに二、三日閉じ込められることさえ我慢できれば、これ以上の制作の場は望むべくもない。吹雪きがおさまった早朝、マイナス二十度を越える寒さの中、頭に黒い帽子をチョコンと載せたような小さな野鳥が、妻の用意した餌を求めてたくさん集まってくる。枝々にへばりついた雪をバラバラ散らしながら、エゾリスが木々を伝って、窓辺までやってくる。ガラス越しに顔をつき合わせ、「たいへんな吹雪きだったなあ…」「三日間なんにも食べてないのか…さあ、ひまわりの種、たべろ……」と声をかける。数えてみたら、年間25種を越える野鳥が集まってくる。そしてエゾリスやキタキツネ等の野性動物、一度だけであるが親子連れ三頭のひ熊が家の裏を歩いた。廃校になった小さな学校の教員住宅が私共の住まい。私の仕事場は四畳半、狭いけれど、宇宙と直接つながっている限り十分な広さを持つ。雪が溶けたら外で制作できるから不自由を感じることはない。

X X X X

我等の直接の祖先ホモサピエンスはおよそ十万年前アフリカを旅立ち、陽の出ずる東を目指したという。ベー

リング海を渡りアメリカへ向かう者、アムール川から南下する者、サハリンを通過してこの地シレットコにまでやってくる者。

すぐ近くに二万年以上前の旧石器遺跡が見つかるから単なる空想ではなく、私の遠い祖先はこの一団に加わって、大型脊椎動物を追って此のあたりを走り回っていたのに違いない。

鮭の遡上する川に注ぐ湧き水を飲み、ひ熊の吐き出す息を吸い、野性の数知れぬ生きものと隣りあって生きていると、私のルーツはここだと熱い想いが湧きあがってくる。

札幌近郊に住んでいた頃より、制作に集中できるけれど、作品売上げのチャンスは極端に少ない。日々の生活は、難行、苦行そのものだけれど、大いなる存在に全てをゆだね、そぞろ神にそそのかさながら生きてゆくのも、これはこれで良しとしなければならない。妻もこの地に棲むことによるのみ表現できる詩作に取り組んでいるから、ここから移動することはもうないであろう。

もし移動するとしたら、流水に乗ってカムチャツカまで行くか、オオワシにたのんでアムール上流まで運んでもらう途しか残っていない。

オンネヌプリ(斜里岳)の「オンネ」とは「年老いた、偉大な」の意、「ヌプリ」は「山」。先住民の敬虔な思想のこもった、大きな構えの美しい山の裾野で、日々を過ごしている。

X X X X

三十九年前の、あの日、あの時のことを書きたい。当時私は、釧路管内へき地四級の小さな学校の教員であった。

ロダン、ブルデル、マイヨール展が札幌のデパートで開かれていることを知り、土曜の午後、急遽車で出発。

真夜中過ぎ札幌着、仮眠の後デパートへ。数十点のブロンズ像はどれもみな、私にふるえをおこさせた。「アダム」のつき出した左腕には太い血管が浮き出、ドクドク

音たてて血が流れているのを見た。ブルデルの「トルソ」、なんと激しく生きていることか！マイヨールの「とらわれのアクション」—悲しい身もだえ—。これらの衝撃は私の羅針盤を狂わせ、嵐の海に小さな舟でこぎ出す大冒険に駆り立てるほど、強烈に私を彫刻に目覚めさせた。二月の札幌、厳しい冬日であった。

雪溶けを待って私は近くの川から粘土を掘り申し、塑像をつくりはじめる。教育大で一応彫塑の単位は取っていたものの第一歩からの自学自習。この年、二十六回全道展に三点出品するも全て落選。翌年再挑戦、同じく落選。「彫刻を学ぶということは片手間にできることではない。二足のワラジをはいているから上達しないのだ」

一足のワラジをはくことが、遅かれ早かれ裸足で歩くことになる現実を知らない年ではないのに、なんとというムボウなふるまい！周囲を説得して教職を辞し、生まれ故郷小樽へもどる。そして二十八回全道展へ三度目の挑戦、落選！一九七三年六月。三十才の苦しい苦しい船出であった。

X X X X

—船は港に係留されているのが、もっとも安全であるけれど、それは船が造られた目的ではない—

X X X X

—あの日、本郷新との出会い—

近代ヨーロッパの具象彫刻が日本に移入されたのは白樺派の作家達をはじめ、荻原守衛、高村光太郎の流れを受けた彫刻家達の力が大きい。全道展彫刻部には、創立会員に山内壯夫が名を連ね、第四回展から、本郷新、佐藤忠良、そして六回展から本田明二が加わり・彫刻部の華々しい歴史が刻まれはじめる。

稚内公園に建つ「氷雪の門」に感銘を受けていた私は本郷新に彫刻を教わろうと考えていた。運良く私の生れ故郷銭函のすぐ近くに、本郷新の春香山アトリエがあった。「彫刻の弟子にしてください」と電話したら「まず作品を見せなさい…」とのこと、すぐ翌日・三年分の作品十五点を車に積みこんで訪ねた。誰の紹介もない、全道展落選組のひとりに過ぎない彫刻修行者に、師はやさしかった。「君の作品は、ホホもヒタイもコンクリートの壁のように冷たい——」「鼻は山のように裾野をしっかりと押さえてつくるものだ。君のは山の瀬上から土がズリ落ちてくるように見える——」。師は全ての作品を見てくれた後に「彫刻家になるというのは乞食になるのと同じこと…五〇才で少しわかり六〇才で半人前…、耐えられるか？…ところで、君の家は銭函のどのあたりかね……」、私は紙の上部に海を大きく描き、「日本海」と記し、私の住む家を○で囲んだ。それを見て師は、はじめてニッコリ笑い、「東京には自分の家を教えるのに、海を基準にする奴はひとりもおらん——」と言った。師の白いヒゲが、バルコニーのそばに立つ桐の花の明るい紫を映しているように見えた。

この地図のおかげで、私は外弟子としての入門を許される。満三十才の七月、うれしい春香山のひとつときであった。

おそらく師と弟子という人間関係は私の世代で終わったのであろう。

先生と生徒は、教えられる者から教える者へ、授業料なり、作品を買うなり、贈り物をするなりという、お金や物が下から上へ流れるのに対し、師と弟子は、お小使いから励まし（叱られることも含めて）まで、もっぱら上から下へ流れる。

どちらが良いというのではない。師と弟子は封建制の名残り、徒弟制度の週末的形であるのに対し、先生と生徒は、社会的身分を確立した市民階級が、芸術文化を享受することのできる、民主主義の証しであることはまちがいない。

弟子入りを許されて秋のことだったか、師が私の仕事場まで足を運んで、つくりかけの粘土像に手を入れてくれることになった。

太く外にしなった親指の腹が、思いがけないほどの慎重さと力強さで粘土を押し上げていく。谷から尾根に向かって指が動くと同時にフウ〜つと息が吹きかけられ、それまで冷たかった粘土が全く違う暖かな物質に変わっていく。「この像はモデルに似せなくとも良いのか……………」と言っている間に、作品は本郷新風になってしまった。

師が東京にもどってから、私は長い手紙を書いた。手を入れてくれた作品は石膏取りをせず間もなく壊したことを書いた。その後、自分は少しの粘土をつけることも削ることもできず、とうとう粘土庫に放り込んだと書いた。そうすることで師の教えを肉体化したと書いた。師からもろん返事はこなかったけれど破門を宣告されることもなかったから解ってくれたのだと思う。

徒弟制度の時代にはありえない生意気な弟子の振る舞いを、遠くから見てくれる師であった。

翌年、私は全道展に初入選する。「74 .my Self」石膏に鉄粉を混ぜこんで創りあげた首の自刻像私の最高傑作である。

X X X X

—本田明二さん、山本一也さんのこと—

お二人の助手をしていくつか制作のお手伝いをした。

樹脂の型どりの際、触媒が少なかったのか入れ忘れたのか、いっこうに硬化せずたいへんなことになってしまった。当然のことながら最初からやり直し、何倍もの時間と労力をおかけしてしまった。お二人に共通しているのはこんな時、けっしておこったりあせったりしないことだ。しごくのんびりと「仕事はこうやって失敗しておぼえてゆくもんだ——」といいながら手を貸してくれる。「今におまえにも良い仕事の順番が回ってくるから、その時のための修行のつもり——これバイト代！」なんと良き先輩方であったことか！

私の後から優秀な若手が続々あらわれ、あつという間に私を抜き去ってしまったから、ずい分狂った順番になってしまったけれど、今に良い仕事に恵まれるだろう。

その日のためにたくさん失敗して修行を続けております。明二さん、一也さん、ありがとうございました。

X X X X

山の中は電波も弱く、我家の受像機が古いせいもあって映りの悪いテレビはほとんど見ない。来年デジタル化が実施されたら我家からテレビそのものが姿を消すであろう。新聞一紙とFMの音楽番組、古いレコード。なによりも我家に情報をもたらしてくれるのは、豊かな森、川のせせらぎ、遡上するシャケ、高い空、風のそよぎ、流水、吹雪き、野の草花や野性の生きものたちだ。

人社会がどれほどおかしくなっているかも彼等が教えてくれる。

世界には一日一ドル以下で命をつないでいる人々が十億人もいる。日本では派遣社員が仕事ばかりか住む家までうばわれている。年間三万人以上が、自殺に追い込まれている。反面、配当金が二億円の株主がおり、役員報酬を八億九千万円受け取る自動車会社の社長が「この金額はあたり前だ」と言っている。オキナワの苦しみを共に苦しめない人々がいて、「戦争に負けたのだから仕方ない」のだと言う。これらの人々は真のよろこびを知らない。生きることの悲しみも苦しみも知らない。だから他の人々の内面に想いがいたらないのだ。オキナワのことわざに、「他人に傷つけられても眠ることはできるが、他人を傷つけては眠ることはできない」とある。愛情深いオキナワ人らしい思想であると思う。

彫刻するという行為は形を造ることによって形を持たない「何ものか」に迫ることだ。

食りと武力による威嚇は形を壊し、形を持たない「何ものか」まで同時に壊してしまう。

——あの日、あの時、個人的幻想断片——

全てが、小さなガラス玉の中に、封じ込められ海は、渴ききって、さざ波もたてず

天空にかかる太陽は、いっこうに輝こうとしない。

私と私の二人の子は、沈みきった渚を、それぞれに歩きながら、小石を、ひとつ、またひとつと拾い集め、卒塔婆を積み上げている。

三つの影以外、動くものはどこにも見あたらず、呼びかけても声は届かず、時々、私にからみつき、遊びながら、音の無い渚に、けな気に卒塔婆を積み続けている。

もう数えきれぬほど、幾たびもくずれた。

——高く積みあがり、できあがったと思ったとたん、音も無くそれはくずれた——

そのたびごとに、私達は、声なく笑うように泣き、またはじめから積みはじめる。

ただただ石を積み続け、最後の最期、あっけなくくずれた石の前にしゃがみこみ、力尽きてまた三人、笑うようにして泣くのだ。

命には、ふたつの生き方しかない。

—一定住者と放浪者と—

—所有して守る者と捨てて真理を求める者と—

人は同時に、ふたつの者になることはけっしてできない。

渴いた魂を宿し、定めなくさまよう船のような父を

持った子に、世界は暖かかったであろうか？

父と別れ、ひとりひとり生きねばならなかった幼いふたつの魂に、太陽はいつも輝き続けていてくれただろうか？

あの日、幼い我子の影は、けだるい夏の午後の弱い陽を浴びながら、私の後を追っていた。かすかな笑みとふたつの鼓動が、私を後から護っていた。

はるかかなたまで渚は続き、三つの影は長くのび、白い海が、いつか、茜色に染まりはじめた。

X X X X

——今、ここ——

日の出ずる東に「何ものか」を求めた師父たちと同じ道を、私もまた歩んでいる。

「何ものか」にいたる道は、果てなく遠い無限に向かいながら、足元の源流に湧きあがる「今、ここ」に通じている。「何ものか」が何であるかを、妻は詩の「ことば」に探し、私は「形」を求めて、淡々と木を刻む。

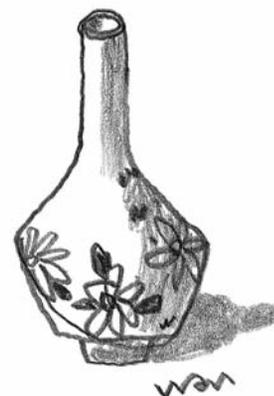
「彫刻は、形の芸術、生涯を通して形とは何かを問いなさい。この問いの答えは、彫刻する行為以外見つけることはできない……」

東京都世田谷、師の語ってくれた最期のことばを、天井の高い、広々とした、大宇宙のような梅丘のアトリエで聞いた。

「全ては、仕事、が、教えてくれる……」

2010年7月

シレットコにて



2. 「全道展事務局長 秘話」

渡 会 純 价

私が全道展事務局長を命じられたのは第35回展(1980年)44才の時である。当時の体制は事務局長、次長(会計)を含めて十人で会務委員会として運営されていた。何分、会務委員は過去の事務局長、次長等が連ね私が一番の若手、次長の嵐玲子さんが三つ年上である。

今から思うと諸先輩を従えてよくぞ統率をとって仕切ったものと我ながら感慨深い。何故、若輩の私に指名されたかには裏話がある。その前、竹内豊事務局長時代に次長として5年間会計の責任者を務めた。当時の全道展の懐は火の車、なんとか策を練らねばと思いつき会員の小品即売展を企画した。確か三越の会場にほとんど全会員の協力を得て陳べることが出来た。珍しい企画との評判よろしく半数以上が捌けた。安堵の胸を撫で下ろしたが、残った作品の処置に困った。作家に戻したのでは均衡を欠く事になり、なんとか全作品を引きとってくれる篤志家がいなくて奔走し、やっと私のコレクターの一人に強引に購入してもらい無事解決、これが効を奏し財政もやっと潤い万々歳となった。その手腕(?)が買われ大先輩の本田明二、柄内忠男、砂田友治元事務局長から強力な声援を受け浅学非才を承認の上、引き受けることとなった。但し、未熟者ながら大胆な発想を認めていただくことのできる了承を取りつけた。

第一に今まで任期がなかった事務局長の任期を三年制とした。事務局長は会務、雑務の代表者ではあっても会の代表(会長制は取っていない)ではない。そして留任を認めないことを付した。どうしても長い月日のうちに

会の代表者としての顔になるのを避けた。

第二に図録として不定サイズを変形A4版とし、画集スタイルに変更した。これが道内の全公募展のスタイルとして継承されてきた。(残念ながら予算などのことで本年度からあらためられることになった。)

第三に会の意思疎通に欠かせない会報(会員のみ)を定期的に発行することにした。現在No.90位まで発行されている。

第四に会友、一般出品者に対する広報誌として「Zenu」を年2回発行し、好評を得ている。今は批評集を兼ねているが、内容的には一考を要しよう。

第五に自ら任務を少ない会務委員で分担し、他の会員にも協力してもらい体制とした。それが今日の四部体制として基盤を固めている。

あとは付則になるが、年数回行われる会務委員会の後に交流会なる名義の飲み会を開いた。堅苦しい会議とは異なり胸襟を開いて語る場となる。私にとっては最も大切なコミュニケーションとして生かした。

現在、15代目の事務局長になっているが、私の前の方々は亡くなられ(竹内豊氏は退会)いまや古参となった。私の後の後藤庸也氏は任期末の会期最終日に急逝。次の久守昭嘉氏も任期を終えたのち倒れ亡くなられた。又バトンした伏木田光夫氏も大病するなど事務局長をやると暗雲がちこめるなど噂されたようだ。「わたらい」だけが健全(?)でいるのはと不審がられているようだ。宿命はいずれ訪れるのだ。

全道展 事務局 変遷

1945 (9.20) 創立展 ('46.6.1~7 ㊟今井)				
第1回展 ('46.11.8~23)~7回まで事務局は道新事業部代行 ㊟今井				
展 覧 会	事 務 局 長	期 間	次 長	期 間
第8回~15回	本 田 明 二	8年	池 田 豊 二 谷 口 一 芳	2年 6年
第16回~25回	柄 内 忠 男	10年	谷 口 一 芳 竹 内 豊 野 本 醇 澁 谷 栄 一	4年 (16・20~22) 2年 (17~18) 1年 (19) 3年 (23~25)
第26回~29回	砂 田 友 治	4年	竹 内 豊	4年 (26~29)
第30回~34回	竹 内 豊	5年	渡 会 純 价	5年 (30~34)
第35回~37回	渡 会 純 价	3年	嵐 玲 子 池 田 正之助	2年 (35~36) 1年 (37)
第38回~40回	後 藤 庸 也	3年	池 田 正之助 久 守 昭 嘉	2年 (38~39) 1年 (40)
第41回~43回	久 守 昭 嘉	3年	藤 井 正	3年 (41~43)
第44回~46回	伏木田 光 夫	3年	山 本 一 也	3年 (44~46)
第47回~49回	斉 藤 洪 人	3年	大 地 康 雄	3年 (47~49)
第50回~51回	嵐 玲 子	2年	中 秋 勝 広	2年 (50~51)
第52回~54回	山 下 脩 馬	3年	関 原 範 子	3年 (52~54)
第55回~57回	米 谷 哲 夫	3年	浅 野 愧	3年 (55~57)
第58回~60回	木 村 富 秋	3年	藤 井 高 志	3年 (58~60)
第61回~63回	高 橋 要	3年	藤 井 高 志	3年 (61~63)
第64回~	渡 辺 貞 之		竹 田 道 代	

私の本棚

「本バカ草森紳一のこと」

森 弘 志 (絵画・会員／新得町)

もう少し有ったはずだが、手元にあるのは『やさしい吸血鬼』『本が崩れる』、ここ最近の永井荷風プチブームのひきがねとなった長大な『荷風の永代橋』、それから1984年の奥付がある『江戸佯狂伝—あの猿を見よ』。以前この本を赤瀬川原平の書齋に見つけ、得心した事を覚えている。

偽りと同義の佯^{よう}の字を、ここで初めて使用したが、いつの日か用いたいと考えていた。後のカルト宗教や、不幸な事件が報じられるその都度、この佯狂の字面が自身の奥底で呼び覚まされ、バブル経済以降の時代気分を見事に言い表していると感じていた。村上春樹—彼もまたその時代気分を作品化し続けているのだが—。

昨春、彼の『IQ84』を買い求める行列の様子がニュースになっていた頃、草森紳一が永代橋傍のマンションに残した蔵書を巡り、僕達は方々と電話を取り交わしていた。

昭和13年生まれの草森は、帯広柏葉高校を卒業後慶応大学中国文学科に進学、出席無し試験満点の彼の処遇は、村松友視の叔父に委ねられ、メンズクラブなどのファッション雑誌編集者から社会人としての第一歩を踏み、フリーの自称「もの書き」となる。評論文で手塚治虫を怒らせる等の逸話は検索を行えば枚挙にいとまが無く、芸術新潮や美術手帖でその名を目にしている人も多いと思う。

そういう草森紳一との出会いは、彼の同級生が経営する帯広の喫茶店にて、およそ30年近く前の美大を中退して間もない頃の事。草森は二十歳そこそこの僕を前に、



強く関心を引くでも寄せるでもなく、圧倒的に大人であった。80年代、度々帯広を訪れ音更に塔の様な書庫を建てていた草森との会話で覚えているのは「僕は君と同じ頃、映画会社に入りたくてね……」。敬意からであろうか、そういえば映画人や映画作品への論評を目にした事が無い。

70歳を迎えた一昨年の桜の頃、北海道立文学館でも、帯広市図書館でも扱い切れない量の著作や蔵書に囲まれて草森紳一は亡くなった。縁あって、ダンボール7百余、3万超の蔵書は音更町と帯广大谷短大が預かる事になった。これから、紙と活字を愛した昭和の知識人のエネルギーに眩暈しながら、詳細な整理と活用法を探っていく事となる。

追記。今年の全道展が始まる直前の6月6日、道新書評でおそらく最後の著作になるであろう『文字の大陸』が紹介された。また、草森蔵書に関する顛末は、円満宇二郎氏のブログ「崩れた本の中から」を参照にされたい。

帯広地区の活動について

渡 邊 禎 祥 会員 (絵画)

65周年記念の全道展も盛会のうちに幕を閉じた。今回展の帯広地区は入選者含めて22名が出展でき誠に嬉しい成果であった。特に入選者9名の中では、佐藤艶子(絵画)が佳作賞に輝き、06年初入から3度目の受賞に拍手。村椿富子(工芸)は会友賞を獲得。楠木康仁(同)は深化したフォルムで佳作賞と新会友に推薦された。初入の佐藤真康(絵画)は昨年東京から実家に戻り、全道展に惚れ込み初出品での快挙、感性豊かで有望な作家に期待。森喜啓(同)は「全道展への入選は長年の夢であり悲願であった」。初入選の感激を大切に。

そして、彫刻部門の森戸春樹は、22年ぶりの復帰入選、仕事もリタイアし、これから腰をすえた制作に期待した



七人の侍 (絵画会員)

い。新進気鋭のメンバーも加わり、爽やかな新風で更に躍進したい十勝勢である。

当地区の会員8名は今年も全員揃って審査会に出席し、任務を果たした事は当然であるが互いに連携を大切に、毎年予想される一般応募者とも日常的に声かけと激励で自信をもって挑戦して貰い、作品搬入者も掌握しまとめて小型運送貸切で効果を高めている。更に大事なことは地区展陳列後の慰労懇親会や新春迎えるの懇親会などで、大いにコミュニケを深め楽しい集いに努めている。

余談であるが、昨年審査休憩時に、室蘭地区のY会員から大声で「やあー今、全道展は帯広の時代だよ！」と。ビックリするお褒めの言葉を戴き、跳び上がる嬉しさであった。過剰表現であれ謙虚に受け止めて、地区会の仲間に伝え大きな激励に感謝し、緊張した次第である。

さて、これから8月開催の「第14回全道展十勝地区展」の準備に入る。つまり、道内各地で水準の高い美術展として高い評価を得た「全道展巡回展」は閉幕して今年で14年目となる。熱く燃焼させた巡回展の炎は、「消しては遺憾！」と地区の所属メンバーが一丸となって閉幕した翌年から「十勝地区展」として立上げ苦勞を重ねて現在に至っている。(巡回展は25回展～51回展まで27年間開催)ここで、当時の巡回展を回想したい。帯広開催の頃は毎年真夏で、展示会場も不備で勿論冷房装置も無く、観覧者も汗だくで熱心に観て貰った。

「個性の競演」と評されベテラン会員の作品と入選の中で上位受賞作品の巡回、地元入選者は各開催地で合流しての展示が認められ、地元ファンからも親しまれ好評であった。年ごとに観覧者もうなぎ登りとなり、実行委員も共通意識で頑張り大きな達成感を抱いたものである。

しかし、当時の市民や美術ファンには「全道展」の知名度は低く、認識不足には悔しい思いをしたものである。画友だった神田日勝は十勝から厳選の全道展に、斬り込み隊長のごとく進出し素晴らしい活躍で、快挙の報道が続く。

多数の方々からの祝福を受けるが、総て「この度、道展おめでとう……」と。その都度、「ボクは全道展です」と訂正するが、いい加減嫌になり不本意ながら「どうでも良いや」と苦笑していた姿を思い出す。またその頃、巡回展を観覧された方に「道展は年に2回開催しているのですか？」と尋ねられ、腰が砕ける思いであったが丁寧に説明したのも印象深いことであった。

でも、本質的には巡回展開催中には、毎回事務局からの派遣会員の来帯でいろいろアドバイスを受け対応したことに感謝し、ある年には国松 登会員の「美術講演会」を企画し大勢の市民が参加され、道内の美術界の流れと動向など国松節の楽しいキャラクターで、道内三公募展の認識を深めて下さり、大好評だった事は忘れまい。今

では地元でも「全道展」はしっかり高水準の団体展として定着し、益々ファンも増し「3年か5年に昔のような巡回展を復活してはどうか」と。要望される声には頭を垂れて嬉しい限りである。それなりに地区展としては本展出品作を軸にし、最低1人2点以上の出品で会場効果を高め、本年は作品展示以外に、「全道展十勝地区会小史」として会場にパネル(年譜)掲示も準備中。薄いセピア色になった初期のパンフから昨年までの図録を全部ひもとき、全道展の歴史並びに、十勝管内の入選者受賞者名をパーフェクトに拾い出しての一覧表など、観覧者への「飛躍する全道展」のアピールに努めている。

最後に、事業である「学生美術全道展」への応募については、残念ながら管内からの応募は低迷状態だったが、地方の高文連関係の美術展のみに安住しないで感性ある若人はどんどん全道規模の学生展で挑戦して欲しいと願い、関係美術展も観覧しながら各校の指導担当者や顧問ともコミュニケを深め、4年前より管内から復帰応募で挑戦し全員入選を果たした。各校クラブ員の後輩にも大きな刺激を与え、入選生徒は勿論担当者からも喜びいっぱいであった。本年も「継続は力なり」で応募作に期待したい。

・第14回全道展十勝地区展

8月5日(木)～10日(火)

帯広市民ギャラリーA室1-2

・田口 丞二木版画展

8月5日(木)～10日(火)

帯広市民ギャラリーB室1

・渡邊 禎祥展～昭和発・平成へのメッセージ～

9月2日(木)～7日(火)

帯広市民ギャラリーA室1-2



全道展の今後に向けて

65周年の節目を迎え、より発展的な全道展にするために、各部門からいただいた忌憚のない意見・要望等を掲載します。

偶感

谷口一芳 (札幌)

2045年 100周年記念全道展の年、また、全道展100年史を編む年でもある。いま、50歳未満の方々なら35年後立ち会える幸運に恵まれるだろう。

だが問題もある。少子高齢化により会員、会友、応募数が逆ピラミット型に進みつつある。社会の趨勢はインターネット時代で応募、入場者は減少の一途にあり、運営資金にも影響を齎している。すでに一部の労務作業は会員の手弁当によっているからである。

果たして現況どおりの展覧会が続けられるのか。行き詰まり解散は簡単である。改革の道は、例えば会員の同人展形式で公募でなく、推薦制の展覧会にするのか。また、展覧会の作品は精選されて鑑賞のあるべき展示空間に、前期、後期制形式とする。これには事務局の指示により出品作家が全員で会場設定に当たる。

会員の定年制（いろいろなケースあり）で新陳代謝、少数精鋭への道等、中央展とかかわる会員が多いことから一般出品者、学生展受賞者の志向に沿う指導を図るなど、新しく生まれ変わる自前の方策等を考えるべきときでなかろうか。

更に考えなければならないことは、本展は創立時から道新と一体となり共催関係にあるが、何れ発展的に独立しなければならない時がくると思う。また、申し合わせの団体から公益法人にすべき時になるかもしれない。これらのことも念頭に置かねばならないと。気になることだ。（老いた いっぽう）

佐久間 恭子 (登別)

65周年記念展札幌祭りも晴れやかに、燃える熱情の続きを感じて心底嬉しく思います。私は8回展が全道展の一步なので、フォービズムの残像を始め、アンデパンダンの自由。創成小学校でデッサン会。エコール・ド・パリ。サロン・ド・メイ。メキシコ絵画。評論家の美学。視線を廻らして学び続けた若輩者はひたすら全道展の道が好きでありました。今日の表現者に出逢うと人間の進化に目を見張ります。それは着実に時代から生まれる新鮮なテーマと描き手の個のセンスが環境、生活や社会から突然「見る者に衝撃と戸惑い」を起す。審査の激論の

火種でもあります。ですが、この新手的表現者こそ、次世代の全道展の担手。何時の時代もそうであって進行し続けることと私は信頼し、背中を押し続けたいと思います。そうでないと仕事場から満天の星と月を安心して観てられないのですから。

土屋 千鶴子 (江別)

全道展が戦後の若々しい時代に生れて65年を経過しました。今私たちは、その歴史をふり返り、創立会員、それを引き継いで頑張ってきた先輩の皆さんの初心の精神に思いを起し、「芸術とは」を改めて考える時が来ている様に思います。

「団体展の意義」

渋谷 正己 (旭川)

作品を作る。発表は個展、グループ展、団体展などがあります。出品数は少ないがより多くの人に見てもらえる場でしょう。

また作品を作り始めの者としては公募展は有効なものでしょう。入選と云う関門がありますが、その事により創作の指針を見極めることもできるものと考えます。そして他の作品を多く観ることのできる「全道展」がより良く続いてほしいものです。

砂田 陽子 (札幌)

20年以上前の昔の全道展は、もっと仲むつまじく、素ほくにやっていたように思います。現在は運営方法や作品づくりは一生懸命やるがそれ以外は割り切って行動する場面が多いようだ。こういう状況にあっても全道展の良さは確実に残されてはいる。各会員の人柄の良さ、会運営のおおらかさ等である。他の団体展の模倣に終始することなく、全道展らしいおおらかさとエネルギーを失わず、熟考して運営に反映していくことを願っている。



突発にそなえて 大 高 操 (恵庭)

地下街を歩いている時、大地震になったら、高層ビルの下を通りながら、ここで爆発がおこったとしたらと想像することがある。待望しているのではなく、いつ突発的な事件がおこるか分からない—との気持をつねにもっているだけの話だ。戦争が終ってまもなく、キューバ危機で間違えば核ミサイルが飛来するかもわからないとおびえたことが頭のすみにこびりついており、いつのまにかそんな感覚が形成されたようだ。

★よく聞く話 「全道展ホームページはなぜないの？」

波 田 浩 司 (札幌)

こんなホームページがあったらいいな～！

1. 会員の作品と画歴を紹介（作品写真は図録に使用したものを毎年添付する……作品が全世界に配信される為、今以上に作品の質がよくなるかもしれない）
2. 入選者、受賞者の発表（道新にも協力依頼）
3. 会員活動掲示板（個展や絵画教室の紹介など）

問題点：誰が更新するのか？ パソコンを定期的に購入（五年毎？）、ソフトの購入費用は？

深 谷 栄 樹 (釧路)

全道展のカラー、精神性にあこがれて出品している人が多いと思う。それは質の向上、個性の尊重といったものであった。それが全道展ファンがいまも多く存在する証だと思います。今後もこれを貫きつつ、また幅広く新しいエネルギーを開拓していく一つの案として出品規約中、絵画の「額装し……」を展示、保管の安全性を条件に廃止し、出品の間口を広げ、もっと自由な表現を取り入れてみてはと思いますがいかがでしょうか……。

「雑感」 渡 辺 通 子 (深川)

「変質し始めている……」。

会場を歩いて思った。如何にも簡単に突破出来ない強いイメージが全道展にはあった。挑発の魅力に溢れていた筈。今、審査する立場になって感じる想いは複雑だ。つい、手を挙げてしまったのだろうか、情にほだされて、私も……

『全道展 70 周年への期待』 宮 地 明 人 (札幌)

私が全道展に出品し始めてから 9 年がたった。出品を

重ね会員の先生との交流を深めるにつれて、全道展という会の新鮮さや柔軟さに、アットホームな印象に魅力を感じた。

今、少子化や不況のあおりを受け出品者の減少という問題をかかえているが、初めに書いたような全道展の魅力が口コミによって広がり、出品者増につながれば良いと私は思う。

5 年後の 70 周年には、全道展が良い方向で変わっていることに期待したい。

北 島 裕 子 (千歳)

初めて陳列作業の手伝いをさせていただきました。限られたスペースを有効に使うためには皆さんの協力態勢が欠かせないという事を痛感しました。そして時間内にピタリと終了、心の中で拍手。日頃展示されている事が当たり前のように思っており裏方の皆さんに本当に頭が下がります。ただ、今のままでは一部の方々の負担が増して大変と思いますので、業者さんにおまかせできると良いのではないのでしょうか。また希望ですが会期中はお休みなしにさせていただけると助かります。

地方からの方もなかなか時間の都合をつけるのも大変かと思っております。

今後にむけて 鶴 江 和 子 (札幌)

地方の知人の多くは、道展と全道展の区別がついていません。地方で全道展・道展・新道展の合同移動展というのはどうでしょう。

また、他の公募展で、会員の先生が学生を連れて鑑賞している場を見かけました。生徒・学生達への鑑賞活動は、未来の作家を生むのではないかと思います。

トクメイ希望

- ①大きな作品が多く、上段は特に見づらい。大きさと勝負しない為にも、公募作品中、1 点は 40～80 号の作品を、含めるようにしては？ 会員・会友は名簿の前半と後半に分けるなどして、1 年おきに小品を出品する。
- ②絵画は出品者が多く、目だたないとダメみたいになってしまう。奇をてらい、美から遠くなって、観客を疲れさせている。7 年たったら落選しない準会友みたいな形を作り、純粋に美を追求する姿勢に変えて行ってほしい。

(匿名)

- 批評会について 批評集を出さない事になったので、批評会の時間、人数を増やしてはどうかと思います。また、ひとりの人が10分以上かかると、後は、1時間内で納まらない。
- 小品集について 全道展会員の小品展を常時行なうと良いと思っています。身近になるとともに、勉強、交流にもなります。
(毎年? 地域で? やりやすいように)
- 全道展なのに「道展?」と言われます。

「全道展」

MINNA

平成元年七月六日、第四十四回「全道展」に“P二十五号の静物画”を、二十一室の九十センチに、つき出た壁面に展示して頂いた初入選が全道展との出会い。落選した六十回展を最後として、絵筆を洗い押し入れに仕舞っ

た筈なのに、未練がましく一昨年から再び出品。今年の自分の絵の未熟さに反省しきり。

買い求めた図録の扉の「ご挨拶」を読み、お話に登場された大平弥生さんの平成元年、「初夏」の作品を手持ちの図録にて拝見した。一筋の道に続く屋並みに暮らす人々の幸せな営みが見えてくる、暖かい良い絵。

「トゥゲザー・アンド・アローン」「みんなで一人」の“みんな”に成りたいと思った。

全道展出品 30年で思うこと

片 岸 法 恵 (留辺薬)

私が全道展に初出品をしたのは社会人になって2年目のことでした。職場と良い先輩に恵まれ、自然と公募展活動を始めました。

色々なことがありました。何が正しく、何が間違いなのでしょう。視点が変われば見え方も変わります。広い心と、広い視野を持ち制作を続けたいと思っています。



受賞のよろこび

受賞にあたって

絵画 大 築 笙 子 (室蘭)

突然のお知らせで、一瞬びっくりし、只々電話にむかい「ありがとうございます」と、頭を下げておりました。このような大賞を戴けるとは夢にも思っておりませんでした。全道展に出品して十八年。試行錯誤しながら只々ひたすら描いてきました。子供の頃の記憶の中に、小さい窓からいつも外をのぞいていたひとりの少年が残っております。その少年の目から見ていた世界はどんなものだったのだろうと思い、五年前から窓を通して、広がる世界を描き始めました。私はこのテーマをしばらく追求していきたいと思っています。

協会賞を受賞して

絵画 平 松 佳 和 (茨城県)

この度は協会賞ならびに会友推薦をいただきまして有り難う御座います。私は現在茨城県に在住し、そこで制作活動をしております。3年前までは油彩での制作を行っていましたが現在では鉛筆での制作を主体とするようになりました。モノクロだけど色彩が感じられる、そんな作品を生み出すことを目標にし、これからも制作活動と発表をしていきたいと考えて居ます。この先どのような作品が表出するか自分でも楽しみです。今後とも宜

しくお願い致します。

母の刻「宙」に

絵画 山 本 美 登 里 (札幌)

六月に逝った母の輪郭を探りながら
私の心に拡がる「宙」を描きたいと思った
母を想うといまだ拭いきれない喪失感がある
しかし
私の「宙」の中での母は、微笑み快活に声を出し
風を帆にはらみ飛びたつ鳥のようだ
蒼空の扉のもう一つの生はだから
躍動と静謐に満ちていなければならなかった—
脱け出せない夢の中を何処に向かって走っているのか
画布の前に立つ私はいつも困惑してしまう
絵の行方はなかなか見えてこないが
遠回りしながら手さぐりで
求めていかなければならない

この度の北海道新聞社賞私にはあり余る賞でした。ありがとうございました。



佳作賞を受賞して

絵画 佐藤 艶子 (幕別)

この度、このような素敵な賞を頂いて嬉しさに戸惑い複雑な気持ちで一杯です。夢を見ているようです。

本当に有りがとうございます。

なにかと未熟な私ですが良き先生に恵まれて感謝の気持ちでいっぱいです。

最高に幸せです。これからも先生のことは諸先生の言葉を大切に、急がず良い作品が出来るよう描き続けて行こうと思います。今後ともご指導よろしくお願い致します。

ありがとうございました。

奨励賞を受賞して

絵画 池田 宣弘 (札幌)

この度3回目の出品で奨励賞を受賞させて頂き大変嬉しく、感謝申し上げます。作品を描き終える度にその後何度も眺めるうちに『こんなはずではなかった……』情けない事にそんな事の繰り返しで今日まで来ました。

そんな中この度賞を頂いた事で後の方からそっと背中を押して頂いた様な、そんな有難い感謝の気持ちでございます。恐らくこれからも描き終えては『こんなはずでは……』に幾度も出喰わすでしょうが、後向きにならず励んでまいりたいと思います。未熟者ですが今後共御指導の程宜しくお願い申し上げます。

奨励賞受賞と仲間との喜び

絵画 小島 英一 (岩内)

2007年に私は絵画部門に、姉・日下部美紀は工芸部門へ初出品し幸運にも姉弟で入選する事ができました。

早いものであれから4年が過ぎ、今年は大変嬉しい事に郷里岩内の仲間、早瀬文子・斉藤敬子の二人が絵画部門へ初出品、初入選する事ができました。

共に歩む仲間が出来ることは何よりも嬉しく今後もより一層の努力をしなければなりません。

先輩の先生方の温かいご指導にも大変感謝をしております。

来年も再来年も皆で全道展のゲートを通過できるように頑張ります。

ありがとうございました。

奨励賞ありがとうございます

絵画 斉藤 保 (旭川)

6年前、初入選に喜び勇んで展示会場へ行きました。受賞者の絵に接し、驚き、打ちのめされ、そそくさと会場を後にしました。

絵に対する感性の鈍磨さ、技術の未熟さ、思いつきを繋ぎ合わせただけの自分の絵に、顔から火の出るような思いをしたことを覚えています。

土台なっていない、入選がベスト、入賞は自分に関わりがないこと、そう心に刻みつつ毎年欠かさず出品してきました。描くことが好きだったからです。

このたび、絶対無理と思っていた奨励賞をいただき、感無量です。ありがとうございました。

これを機にさらに研鑽を積んでまいります。

奨励賞を受賞して

絵画 佐々木 ゆか (札幌)

この度は奨励賞をいただき、どうもありがとうございました。とても嬉しかったです。

学生生活と労働の毎日によって得る事の出来た、作品と結果でした。

全道展に挑戦して5回目となりまして初めて「賞」をいただき、今後の自信につなげ、精進していきたいと思えます。

また、審査いただいた諸先生方、指導して下さいました先生方、先輩や仲間たち、家族に深く感謝申し上げます。

今後ともご指導の程をよろしくお願い致します。本当にありがとうございました。

絵画 菊池 ひとみ (新十津川)

この度は、会友に推薦くださりまして、有り難うございました。

35回展が初入選でしたから、全道展に出品するようになって、早いもので30年の歳月がたちました。その間には、家庭の事情により、絵から遠ざかる時期もありましたが、こうして会友に推薦して頂き、今まで辛抱強く挑戦し、続けて来て本当に良かったと心から思います。支えて下さいました諸先生方、そして仲間の方々に深く感謝いたします。

これからも、努力しましたと胸を張って、言えるように、一生懸命精進してまいりますので、ご指導のほど宜しくお願い致します。

風の画布

絵画 佐藤 かずえ (札幌)

長い間、憧れだった全道展、一生のうちに手の届かない高峰であった全道展に出品出来ただけで幸せでしたが、今回全く思いがけなく会友に推薦して戴きこの上ない光栄に震える程の感激を覚えます。この想いを心のキャンバスに深く刻んで未知の画境に彩りを重ねてゆきます。何卒御導きの道標をお示し下さい。

陋屋ろうおくの小部屋に風が画布を曳いてきます。描かれている像を少しでも読みとれるように精進いたします。

絵画 伊藤 幸子 (苫小牧)

この度は、会友賞ありがとうございました。今後も描き続けてゆく上で大変励みになります。昔読んだ本の中に、『作品には主題がある。主題の持つ本質を描ききった時に傑作が生れる』という一文があり、深く心に残りました。以来、自分にとっての主題とは何か、主題の持つ本質とは何か、について自分なりに考え続けてきて、拙いながら現在の表現になったように思います。すばらしい先輩が大勢おられる全道展でこれからもすこしずつ成長してゆきたいものと思っております。

絵画 会田 千夏 (札幌)

この度は、全道美術協会会員に推挙していただき、ありがとうございました。

今迄は、自分自身の勉強の場、力試しの場として全道展への出品をつづけてきました。これからは、それ以上に、一団体に属することとはどういうことなのか、北海道の数多くある文化的な運動の一つとして、その中に身を置くことで、社会的にどんな役割ができるのかを良く考えていきたいと思っています。どうぞ宜しくお願いいたします。

絵画 川本 エミ子 (石狩)

この程、会員推挙となり自分でも会友時代が長かったせいか驚きと緊張と今後の絵の事を思うと本当に心は複雑です。

考えてみると、これからは誠の勝負なのです。それでも自分らしく、そう気負うこともなく制作し続けられたいのですが、あれよこれよと、いつも、考えている内に何かを発見し生むものがあれば良いと探しものをしていく自分に気づきます。

私の人生は、生涯何かを探して生きています。今まで私を育てて下さった全道展の為、感謝し全道展の名に恥じない作品を描く様、励みます。ありがとうございました。

絵画 山本 恒二 (恵庭)

この度は、思いがけず新会員に推挙して頂きありがとうございます。

昨年、定年をあと一年と云うところで退職し早く制作中心の生活を、と思っておりましたがなかなか思う様にはリズムがとれず、ついに第65回全道展の出品時期を迎えてしまいました。8月末に個展も控えており気になりながらの制作でしたが、思いがけなく記念展でお且つ人生の節目の年に会員になれると云うことは驚きであり大きな喜びであります。今後も緊張感を持って制作していきたいと思っておりますのでよろしくお願いたします。

版画 坂 みち代 (札幌)

この様な大変な賞をいただき、今だ戸惑っている状態です。これから先はさらにしっかりと作品を作っていかなければ……と正直気が重くなった様な気も致しますが、そういう気持になるのも大切な事と思ひ、もっと良い作品が出来るよう気を引き締めて頑張っていこうと考えています。ありがとうございました。

版画 浅川 良美 (江別)

人間は道具を使える動物である。木版画は、中国から朝鮮を経て日本へきたということですが、伝統的芸術に築き上げた昔の人はすごい！ 板に彫った彫刻刀のいろいろな効果・色を溶かす水の加減・紙の湿し具合・バレンの力の入れ方などの相乗効果で表わされる世界は美しい。でも、私は、何一つ満足にできない。もし、それができるようになったら、自分の表現（内面）が見えてくるのだろうか？

また、木版画の魅力に引きずり込まれていく……。

奨励賞を受賞して

版画 石塚 善朗 (札幌)

この度は、思いがけず賞を頂き光栄です。これもひとえに、ご指導頂いた諸先生や周囲にいる仲間のお蔭と思っています。賞は、まあ入選だけでもという私の気持ちを叱咤する意味があったのかも知れません。然し私とし

ては、力を入れた作品が落選し、員数で出した作品が受賞、ちょっと複雑。私の審美眼に問題ありそうです。家内からも、ゴミステーションの鴉の版画など止めたら忠告もあり、いろいろ混乱のきわみです。

版画 佐藤拓実 (札幌)

僕が初めて全道展を見たのは、高校一年生の時の第63回展でした。それから二年の間に銅版画を制作し、全道展に出品して、入選し実に奨励賞を頂けるとは当時は夢にも思いませんでした。

今、僕は北海高校の美術部で活動していますが、高校入学当初は部活動を行う気が全くなかったことを思い出すと、美術によって充実した今までの高校生活を、もし送っていなかったら自分はどうなっていたらろうか、と考えて恐ろしい気持ちになります。そして、僕の心を豊かにしてくれた美術に巡り会えたことを、本当にありがたく思います。

『肩にかかった重い荷物』

版画 大澤 あい子 (札幌)

思い掛け無い大きな褒美ありがとうございます。今の私にはとても重すぎるものですが少しでも楽しみながらこの肩にかかった重みを軽くしていけるよう活動していこうと思います。大それた事を言いますが自分の世界観を持てるようになりたい。その為には遠い遠い道程が待っている、焦らず前を向いて歩いていきたいです。どうぞ宜しくご指導下さいますようお願い申し上げます。

—新会友に推薦されて—

版画 高崎幸子 (恵庭)

「私が新会友??」もう落選の心配は無いのだと、思わず笑いがこみ上げてきました。しかし、それも束の間。だんだん不安になってきます。そうです。まだまだ未熟なのは自覚しています。ほっとしている場合じゃないのでした。

それでも何とか日頃の想いを形にしていきたいのです。

この度は、版画を続けていく上で、大きな励みとなりました。感謝しています。今後共よろしくお願い致します。

版画 阿南 ゆう子 (札幌)

この度は、第65周年記念全道展で会友賞をいただき、心から感謝しております。

私は小さい時体が弱く、横になっては絵を書いていた子供でした。

私に記憶はありませんが、手のない子供ばかり書いているので、先生に相談した所、それは、お母さんが私の手の代りをしているからですよと言われたと、母は言っていました。

今はこの逞しい二の腕を使って、大好きな版画に取り組む事が出来たのも、母の愛があってこそと思っています。

これからも、自然体で、皆様に助けられながら、制作していきたいと思っています。ありがとうございました。

「砂場と12と私の死体」

彫刻 川上加奈 (江別)

ある日、アトリエに行くと私が死んでいた。死んでしまったものはしょうがない。

娘の砂場が私の作業スペースよりも大きい。しょうがないのでアトリエの片隅で作業した。顔にできたシミやらシワやらをしょうがないと放っていたら、姉に酷く叱られた。色々「しょうがない」で済ませていたが、色々しょうがないらしかった。

会員に推挙していただいたことだし、しょうがないので、もうしょうがないはやめて、生活、制作共に気合を入れていきたいと思う。



「多くの仲間を支えられ」

彫刻 森川 ヒロシ (釧路)

カンゾウの蕾が膨らみ始めた頃、札幌から嬉しい知らせが届いた。本当に有り難い。釧路の仲間はずっと多くの仲間を支えられ、25年の歳月を全道展と共に歩んでくることができた。シリウスの瞬きや野にたわむ草花に愛おしさを感じる心の有り様も全道展に育てられたものと思っている。自身の心の奥深くに降り積もった記憶の断片を、結びつけては紡ぎ出す。それが今の私の大切な仕事。この先も、自身をしっかり見詰め全道展と共に歩み続けたい。

工芸 楠木 康仁 (幕別)

老後の楽しみにと思って始めた陶芸です。農家ですから土には親しみがあり、先生や仲間にも恵まれて時間のたつのを忘れて、無心に粘土を形造って居る時が大好きです。始めは小さな窯、今は大きな窯を自作して、焼物に生がいを感じながら、入選を目標に出品させてもらった私に会友推薦の知らせ。うれしいよりびっくり。これからは今迄とは立場が違う事を自覚して、物忘れの激しい年代である事は忘れて、あきらめず、楽しみながらこつこつと前進しようと思っています。

工芸 堀田 佳代 (札幌)

「佳代ちゃんありがとう。いいものたくさん見せてもらったわ。」お婆の言葉である。全道展に初入選して以来、

酸素ボンベを引くおじと私の母とで、全道展に足を運んでくれる。

昨年と本年、佳作賞を頂き、新会友に推薦され、来年の全道展には審査なしで作品を展示して頂けるのだが、「入選おめでとう」のお婆の言葉が聞けなくなるのは少々さみしい気がする。

いやいや頑張るのは今からだ。

作品を高く評価して頂いたことに感謝しつつ、より一層、作品作りに励まなくてはと決意している。

会友賞を受賞して

工芸 村椿 富子 (芽室)

思いがけない会友賞を戴き吃驚いたしました。

陶芸を通して、色々な人達との出会いと意見交換が、自分の陶芸に対する意欲の持続性に繋がっていると改めて感じました。

釉薬の複雑な景色に、焼成窯を開ける度にワクワク・ドキドキし、創造の世界を膨らませていくのも楽しいことです。

素晴らしい賞を頂き、先生や多くの方々に感謝するとともに、これを一つの励みとして作陶し続けていきたいと想っています。

ありがとうございました。



『人を育てる……』

全道美術協会事務局長 渡辺貞之

私が全道展に初入選したのは33歳、第28回展の時でした。以来幾度となく落選を繰り返しその度に挫折感を味わい、幾度か受賞すると有頂天になり、とにかく私の画業は全道展の中で育ったと思っています。

「全道展という所は人を育てる所」……その時々作品の善し悪しを問うより、どういう作家になっていくのか、それをいつも問われていたように思います。とにかく当時の会員はじつによく出品者の作品を覚えていてくれました。講評を願うと決まって、前回との変化、次回への見通しを問われました。

こんなことがありました。「旅人」という題の私の作品の前で、「この旅人は、君自身なのかい?」「はい、そのつもりですが……」「ふーん、つまらん、つまらんよ、君!」「えっ?」「君の旅人は、道を歩いている」「はあ……」「だからつまらんといいてるんだよ」「……」「絵を志す者が、人が歩いた道を歩いていくなつたらつまらんじゃないか。荒野を歩きなさい、荒野を! 誰もが歩かない荒野を汗水垂らして、一步一步進んでいく。それが絵描きの世界つてやつだ」

「どう描いていいかわからなくて、いろいろやってみたんですがどうしても描けなくて、苦労しました」「ふーん、それで?」「それで……なんとかできたと思うんですけど……」「ふーん、それで?」「え? だから、先生から見るとどうなのかなと……」「そんなこと聞いてどうするんだ。もし私が駄目といたら君はこの絵、どうするんだ? またやり直すのか? そんな見通しが簡単にできるのか?」「はい……」「君の中に、苦労したからどうですかという、甘えを感じるな……。ここはそんな傷を癒す所じゃないよ。むしろ自分の甘さ加減を身に沁みて家に持ち帰る場だよ」

「君は何歳になった?」「えっ、35歳ですけど……」「ふーん、つまりそんなに若いって歳ではないということだ」「そう……ですね」「若い頃にはあんまり注目されなかったってことか」「まあ、そういうことですね」「それはよかったかも知れないなあ」「はあ?」「若いうちに認められると、調子に乗りすぎるか、型にはまって動きがとれなくなるってことか」「はい……」「誰にも注目されていないんだから、大いにツッパシロよ。間違っても自己模倣なんて小賢しい世界にのめり込むなよ」

こうした言葉の裏側に「人を育てよう」とする先輩諸氏の全道展の熱いコンセプトを感じます。

翻って今、私たちはどうなのでしょう……。



65周年記念企画展

全道展会員展

2010年12月9日(木)～12月14日(火)

全道展ゆかりの作家展

2010年12月16日(木)～12月21日(火)

道新ぎゃらりー

北海道新聞社北一条館1階 道新プラザ内

第52回

学生美術全道展

2010年10月2日(土)～6日(水)

※10月4日(月)は休館

札幌市民ギャラリー

搬入 9月28日(火)

審査 9月29日(水)

陳列 10月1日(金)

授賞式・作品批評会 10月3日(日)13時より

※搬入、審査、陳列、授賞式、作品批評会に
多くのご出席をお願い致します。

65周年記念全道展 受賞者展

2010年10月28日(木)～11月2日(火)

大同ギャラリー

10月28日(木)

オープニングパーティー

※多くの会員・会友の方のご出席をお願い致します。

新事務局体制での「ZEN」の編集を終え、最初の準備作業の重要性を痛感しています。
編集作業にあたった庶務部の皆さん、お疲れ様でした。